

第2回災害対応国際会議に登壇しました (2024/4/24-25)

テーマ：どのように巨大災害に対応するか

会場：トゥールーズ大学病院救命救急センター講堂（トゥールーズ・フランス）

2024年4月24-25日にトゥールーズで開催された第2回災害対応国際会議において、災害医学研究部門の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）に登壇しました。

トゥールーズ大学は欧州委員会（EC）の助成を受けて大型の災害現場シミュレーション施設を新設し、そのお披露目とともにヨーロッパをはじめとする40か国から400名の参加者を得て第2回災害対応国際会議を開催し、さまざまなハンズオンセミナー、シンポジウムが行われました。大型シミュレーション施設は2018年にトゥールーズで起きた工場の大規模爆発の模様を、救急車やヘリコプターの胴体が設置できるほどの広さの空間に画像、音、気温、降雨、においなど五感に訴えるさまざまな刺激を用いて再現することができる施設で、Environmental and Neurosensory Simulation（環境と知覚によるシミュレーション SENS）という名称がつけられています。

ヨーロッパにおける災害は、洪水、地震、火山などの自然ハザードと、工場爆発などの技術ハザード、テロや武力紛争などの社会的ハザード、パリオリンピックを控えて大人数が集まるスポーツイベントでの備えなどの話題が多くなります。江川教授は、わずか80年前には、わが国でも戦争が現実のものとしてあった事実を踏まえ、ヨーロッパや中東で起きている武力紛争の終結と平和の重要性を説いたうえで、長寿高齢化社会が災害にレジリエントな社会であることをわが国の災害医療体制とともに説明しました。災害・健康危機管理に関するWHO研究ガイドンスが教科書として活用できることや、2025年には東京で世界災害医学会（WADEM 2025 Tokyo）が開催されることも紹介し、世界が災害に対してレジリエントであるための研究の大切さを強調しました。



わが国の災害医療体制について講演する
江川新一教授



トゥールーズで実際に起きた工場での爆発
を再現する大型シミュレーション施設
SENS